

例えば、平安後期の『堤中納言物語』のなかでは、虫めづる姫君は、庭先のどるどりない虫けらに愛情を注ぐ「妙な人」と見なされ、登場する虫たちとは、毛虫をはじめ氣味の悪いも

れる。したがて、自然にいわば二次的な存在となつてしまふ、登場人物の心の動きを浮かび上がらせるための付け足しがすぎなかつた。

しかし、中世にはいると、自然と人間の距離がもつと近くなり、あたかも連続しているかのように描かれるはじめるのである。中世小説のなかに現れる動

# 中世の世界

## バーバラ・ルーシュ (米コロンビア大学教授・中世日本研究所所長)



菊の精の若者との悲しい恋=「かざしの姫」絵巻から

(イラスト・安芸 早穂子)

ものでなく、もっと実り多い豊かな有機的世界であった。中世の日本にこんなユニークな世界が創造されたのである。かつて私は、中世小説の一つ、「小

ひるがねの中世には、人間と一緒に生きていろいろな生物がたがいに自由に交流である。一つの統一体としても形容できるよ<sup>ウ</sup>な世界が誕生したのである。この世

の文化的貢献がまことに今  
曰、中世小説を再認識し、例え  
ば『かざしの姫』のオペラ化に  
取り組む人は出てこないのだろ  
うか。

の二人の仲をとりもつべく、士活躍するなど、きわめて独特があるとともに、心温まる物語である。

などが好まれているが、みずからがつくった素晴らしい物語をほとんど評価せず、忘れてしまつたことである。日本の世界へ

が、彼は、中規  
小説の一つ、  
『をとせ』を好  
んだ。山の神が

## ●中世小説再認識の時

ち人間どもを連しあげるこ  
を描きたしており、その点でち  
注目される。南方熊楠は、植物  
が実際に人間と同じ感情をもつて  
信じていな

『かさの姫』にして、『をじせ』にしても、またその他の中世物語にしても、作品の質は、きわめて高く、もっと評価されしかるべきと思われた。

の奥底に潜む寂しさを見事に描いてゐるという点で素晴らしいが、同時に、植物が感情をも

敦盛<sup>あむら</sup>がシェークスピアの『ハムレット』に比肩されるほど素晴らしい作品であると論じた

.....<メモ>.....

小敦盛 熊谷直実に父。  
敦盛を殺された小敦盛は、  
芸然上人に育てられる。平  
氏の子のため、いじめられ  
るが、上人のはからいで身  
を秘していた母が名乗り出  
て、涙の対面となる。同じく  
上人の門に入っていた熊  
谷はことに驚き、進んで當  
時の状況を説明する。

亡き父に会いたいという、小敦盛の思いは増す。夢に出ていた賀茂の明神のお告げで、生田に行く。古い堂の中で、父とおぼしき男のひざをまくらに寝入ってしまう。すると「学問に励み高僧となり人々を救ってほしい」という声がした。堂も父も消え失せて、ひざの骨だけが残った。小敦盛は出家する。